

2011 年度 東北大学大学院文学研究科長裁量経費事業

「縁側で『こんにちは』」プロジェクト

－ 共有・共感・共生空間の創生 －

活動報告書

取組責任者

東北大学 大学院文学研究科 言語科学専攻

日本語教育学専攻分野 准教授 名嶋義直

1. 事業展開の背景

東日本大震災発生から時間が流れ、被災地の人々は自分たちが忘れ去られてゆく焦燥感を抱いている。その一方で、ローカルな従来の地域社会は地縁血縁関係を超えた文字通り「仮設」のコミュニティに突然再構築され、他者同士が新たな関係構築を目指さざるを得ないというグローバルな課題に直面している。「多文化共生社会の構築」である。

しかし実際の中で話を伺ってみると、周囲の人々とコミュニケーションをとる機会がなかなか見つけにくいということもわかってきた。もしそこに昔の「縁側」のような空間があればどのようなことが起こるだろうか。近くを通りがかっただけで誰かとコミュニケーションが始まることもあるのではないだろうか。自然発生的なコミュニケーションを生み出す環境整備のようなことを継続して行えないかと考えたのが、このプロジェクトの始まりであった。

2. 本プロジェクトの目的

本プロジェクトでは、これまで地域社会や多文化共生と関わってきた日本語教育学の知見と人的ネットワークを活用してこれらの課題解決を支援することを目的とする。多文化共生社会という今後の日本が歩むべき道を見据えた上で、「被災地と他の地域」・「日本と世界」の構成員が、互いが人として対等に「共生」していく能力を高めるため、「共有・共感・共生するコミュニケーションの場」としての「縁側」を開設し、多文化共生の実践機会を提供する。その活動を通して「元気」を取り戻すきっかけづくりを試みる。

3. 活動

3.1 活動概要

東北大学 大学院文学研究科 言語科学専攻 日本語教育学専攻分野 准教授 名嶋義直が取り組み責任者となり、東北大学文学部・文学研究科の教職員・留学生・日本人学生からボランティアを募り、4〜6人の多国籍チームを形成し、名取市の仮設住宅を一ヶ月に数回訪問し、おしゃべりができる場として「縁側」を設置する。そしてそこで訪問者とコミュニケーションを実践する。被災地への関心を継続して喚起するため、活動報告を、個人情報等に留意しつつ活動を適切な手段（HP等）で発信する。留学生・日本人学生からボランティアを募るのは、事業をうまく展開させるためというのが大きな理由である。一般的に言えば、被災者にとって留学生・日本人学生は遠い人物であるということができよう。しかし、それゆえにお互いがコミュニケーションする動機付けが確保されるとも言える。留学生・日本人学生側から言えば、世代・文化・国を超えた異文化理解実践の場となり、研究科の知名度向上はもちろんのこと、社会貢献だけではない教育効果が期待される。

ボランティア参加者には活動終了後、簡単な活動報告書の提出を義務づけた。これは、自己の体験したことを客体化して位置づけることを通し、新たな気づきを誘発し、次回以降の活動につなげることを意図して行うこととした。

3.2 具体的な活動

(1) 「移動式縁側」

仮設住宅団地を一ヶ月に2～4回、日帰りで定期的に訪問して、全天候型大型テントと複数の二人掛けの折りたたみベンチを使って、屋外にフリースペース（移動式縁側）を作り、自由に使ってもらえる開放的で、かつ、快適な空間を創造する。縁側に飲み物とお菓子はつきものなので、簡単な飲み物（コーヒーとかココアとかお茶とか）やお菓子を提供し、一定時間留まってコミュニケーションが生じやすい環境を整える。たとえば、ここでは以下のようなやりとりが生じることが予想される。

「縁側」でのコミュニケーションの例

「あ、なに、ここでコーヒー飲めるの。へえー、じゃあ一杯もらおうかな」と言っ
てAさんが入ってきました。コーヒーを受け取って飲んでいるその前を、面識のな
いBさんが通りがかり、同じように我々に気づいてお茶を頼みました。座る場所は
折りたたみ式のベンチで二人がけです。袖がふれ合うくらいの相席になりました。

Aさん：あ、こんにちは

Bさん：あ、どうも

Aさん：寒いね

Bさん：んだね

Aさん：何号室？

Bさん：あっちの203

このような会話が始まるそのきっかけづくりを、そこにお住まいの方々といっしょに行
いたいと思い、活動を計画した。

(2) いっしょになにかをする

移動式縁側だけではなく、別の「集まっていっしょになにかをする」場を、不定期はある
が、複数回、設けた。普段の生活の中に少し彩りを添えたり少し快適にしたりするもので、
かつ、その活動後も地域の皆さんが自分たちで継続して実践していくことが容易にできる
ようなものを考えている。子どもにも参加してもらえよう、一緒に遊んだり、勉強のお
手伝いをしたり、ということも考えた。

この「いっしょになにかをする」時間は、一種双方向的なワークショップのような形とな
る。その講師は取組責任者の個人的ネットワークを駆使して招聘する。取組責任者の専門
領域は日本語教育学であるが、日本語教師という職業人は、日常的に多種多様な国籍・年
齢の外国人と関わるため、「多文化共生」に対する意識が強い。日本語教育では教師・学生

ともコミュニケーションな授業を実践していることもあり、一般的に人の話を聞くことに長けている。そこから、効果的にコミュニケーションを誘発し、展開していく効果が期待できる。

3.3 活動場所、活動日、広報

宮城県名取市の仮設住宅団地の中から、愛島東部住宅団地を選び、当面はそこに限定して活動を行う。これは、本プロジェクトと協力関係にある「なとり復興支援センターひより」と協議の上決定した。

2011年の12月中旬より具体的な訪問活動を始めることとした。以後は、一ヶ月に2〜4回、土曜日か日曜日のどちらかを選び、定期的な訪問を行うこととした。

広報に関してであるが、学内に対しては取組責任者が文書を作成し、本研究科HP、ならびに、日本語教育学研究室HPに掲載を依頼した。後藤斉先生と田中重人先生には掲載にさいしご協力をいただいた。ここに御礼申し上げる。

4. 活動報告

4.1 参加者

東北大学文学部・文学研究科からボランティアとして参加したのは以下の13名である。所属先や身分、学年は2012年3月26日現在のものである。

表1 東北大学からの参加者（順不同）

氏名	所属先, 身分, 学年等
名嶋義直	文学研究科日本語教育学専攻分野 准教授
竹中 歩	文学研究科 GCOE 准教授
謝 暁静	文学研究科 GCOE 研究員
菅井良恵	文学研究科庶務係
梅木俊輔	文学研究科後期課程2年 日本語教育学専攻分野
宿利由希子	文学研究科前期課程2年 日本語教育学専攻分野
森 瑤子	文学研究科前期課程1年 英文学専攻分野
伊藤崇志	文学研究科前期課程1年 倫理学専攻分野
高橋 良	文学部4年生 フランス文学専修
キュウ・キ	文学部特別聴講学生3年 日本語教育学専攻
朴貞和	文学部特別聴講学生3年 インド文化学専攻
テ・ヒウン	文学部特別聴講学生3年 日本語教育学専攻

東北大学からのボランティア参加が少数であった時は、必要に応じて、取組責任者が学外で信頼できる応援者を募って運営に協力してもらった。

4.2 活動記録

2011年12月17日より実質的な訪問活動を開始し、3月31日まで計12回の活動を行った。実施日と活動内容は以下の通りである。

表2 2011年活動実施日とその内容

実施日	活動内容	備考
2011.12.17	縁側 クリスマスリース作り	東北大学ボランティア7名参加。 講師として山森理恵氏を招聘
2011.12.25	縁側	東北大学ボランティア5名参加。
2012.1.9	縁側 書き初め	東北大学ボランティア6名参加。 ボランティアの伊藤崇志さんが中心となり企画運営。道具面で東北大学書道部、指導面で東北学院大学書道部の協力を得た。
2012.1.14	縁側	東北大学ボランティア7名参加。
2012.1.21	縁側	東北大学ボランティア5名参加。
2012.1.29	縁側 フラワーアレンジメント	東北大学ボランティア5名参加。 ボランティアの菅井良恵さんが講師を務めた。クリスマスリース作りで講師を務めた山森理恵氏がボランティアとして応援参加。
2012.2.4	縁側	東北大学ボランティア5名参加。
2012.2.11	縁側 アレクサンダー・テクニーク ワークショップ	東北大学ボランティア7名参加。 講師として安田ヨウコ氏を招聘。 応援のため他3名の同行者あり。
2012.2.26	縁側	東北大学ボランティア4名参加。
2012.3.10	縁側	東北大学ボランティア2名参加。
2012.3.24	縁側 フラワーアレンジメント	東北大学ボランティア7名参加。 講師として山森理恵氏を招聘。 応援のため他1名の同行者あり。
2012.3.31	縁側	東北大学ボランティア2名参加。

活動場所である愛島仮設住宅団地における広報は、本事業の説明を行うポスター、各種活動のポスターとチラシを作成し、名取復興支援センターひよりの協力を得て、回覧と掲示を行った。ポスターとチラシの作成は東海大学非常勤講師の山森理恵氏にボランティア

として協力していただいた。改めて御礼申し上げます。

また、ブログを通して活動の日程と概略の記録を行い、記録と同時にそれを対外的に発信している。URL は以下の通りである。

<http://blog.goo.ne.jp/engawa2011>

予算の執行に関しては会計系の指導と管理の下で、必要かつ適切な執行を行ったことを併せて報告する。

4.3 成果

当初は月に1〜2回程度の訪問を考えていたが、お住まいの方々に、我々が活動していること自体を認知してもらい、その空間にいることを容認してもらう必要があると考え、月3〜4回の頻度で訪問することとした。その結果、比較的早期に我々の居場所を確保することができたと考えている。

毎回参加してくださる方が複数いらっしゃることも、他の類似のイベントの後でも我々の活動に参加してくださる方がいらっしゃることも、「楽しみにしている」とか「次はいつだ」とか声をかけてくださる方がいらっしゃることも、同時開催のイベントを楽しみにして下さっていること、そしてなによりも「縁側」でにぎやかなおしゃべりが展開していることを考えると、一定の成果があったと考えられる。

2012年2月26日にはNHK ラジオ第一放送「らじお朝いちばん」の取材を受け、翌週3月5日には本事業の取り組みがラジオ第一放送（全国放送）で放送された。社会的にも本活動の意義が広く認められたと考えてよいであろう。

仮設住宅では他のボランティア団体と活動時間が重なったり一緒に活動したりすることがあった。取組責任者間やボランティア間で交流する機会もあり、示唆を受けたりつながりができたりすることもあった。これも成果の一つである。

最後に、「縁側」の活動に参加した教職員や学生ボランティアにとっても、単なる社会貢献というだけではなく、それぞれの想いを持って現実と向き合い、自分自身と向き合う有意義な機会となったようである。留学生にとっては単なる通常の留学生活では得難い貴重な経験を得たとも言える。そのような点においても一定の成果があったと考えられる。

以下では、ボランティア自身による感想をいくつか掲載する。また、ポスター・ちらしの作成、フラワーアレンジメント講師と応援、というように我々の活動を支えてくださった東海大学国際教育センターの山森理恵氏から寄稿をいただいた。併せて掲載させていく。

特別寄稿

「縁側で『こんにちは』プロジェクト」に参加して

山森理恵（東海大学国際教育センター）

このプロジェクトは、仮設住宅団地で、共有・共感・共生空間を創生することを目的に立ち上げられました。「語りの場を提供する」「いっしょに何かをする」という二つの柱から成っています。私は学外の人間でしかも首都圏在住なのですが、このプロジェクトがスタートしてから、主に「いっしょに何かをする」活動を中心に何回か参加させていただきました。プロジェクト開始時に「何かワークショップができないか」というお話を聞いたことがきっかけです。東日本大震災の後、自分にできることは何かということはずっと考え続けていたものの、なかなか現地に行って自分にできることを見つけられず、行動できずにいた私にとってはいい機会でした。自分の得意とする技を發揮すればいいわけですから。参加する前は、何か少しでも被災された方々のお役に立つことができれば、という気持ちでした。

しかし、実際に参加して考えが変わりました。仮設住宅にお住まいの方々と直に接し、話をし、共に時間を過ごし、同じ作業をすることで、人の役に立つというより、私自身が多くのものを得られる場だと感じたのです。きれいなものができたと目を輝かせ笑顔になるみなさんを見て、私自身がいっしょに何かをする喜びを、感じ、分かち合うことができました。初めは次の参加までは考えていなかったのですが、私が「共感」を求めて足を運ぶことになりました。

私のこれまでの活動は「いっしょに何かをする」ことが中心です。ただ、いずれの活動も、一見こちらが担い手となって場を提供しているようで、実はこちらの「共有・共感・共生の場」となっているように感じます。そういった意味で、担い手として参加させてもらう者にも、貴重な場なのではないかと感じます。

今後も、仮設の方々の生活に少しでも彩りを添え、自分の心の中にも彩りを添えるために、時々お手伝いをさせていただこうと思っています。

「縁側で『こんにちは』プロジェクト」に参加して

菅井良恵（庶務係）

私が「縁側プロジェクト」に参加を決めたきっかけは、被災地が大変な状況である中、なかなか一歩が踏み出せない自分にもどかしさを感じていたことにある。震災後、実家の父は被災者の受け入れ準備に奔走し、写真家のアシスタントをしている姉は、想像を絶する被災地の状況に体力的・精神的に衰弱しながらも連日被災地に通っていた。私が勤務する大学内でも、多くの教職員・学生が震災関連活動に携わっていた。機会があれば私も、と思っていたところにボランティア募集のお知らせを知り、スタッフの一員として参加することを決めた。

縁側プロジェクトは、津波被害の大きかった閑上地区の住民が住む仮設住宅で活動を行っている。私も被災したとはいえ、家族も無事で、住める家もあり、仕事もある。私のボランティアは、仮設住宅で暮らす住民の方々にどのように接していくべきか、悩みながら始まった。家族のこと、生活のこと、仕事のこと、何を話題にしてよいのか、どこまで聞いてよいものか、それさえも分からなかった。

実際に活動が始まると、私の心配とは裏腹に、住民の方々が、思っていたよりも笑顔で接してくれることに驚いた。テントを張り、お茶やお菓子の準備をするボランティアスタッフに、自慢の手品を見せてくれる方、得意な釣りの話を聞かせてくれる方、自宅で漬けた漬物を差し入れしてくれる方、無邪気に「遊ぼうよ」と寄ってくる子ども達。

「ボランティア」という言葉から、「被災者のために何かをしてあげるもの」と思い込んで活動に参加していた私は、すぐにその考えが間違っていたことに気付いた。同じ時間を共有して、喜びや楽しみを分かち合うことが、住民の方の癒しにもなっているようだった。被災してそれぞれに辛い状況であるのは事実だが、肩の力を抜いて一緒に笑い楽しむことで、現実に向き合っていく力を作り出す場所になっているのかもしれないと思う。

縁側プロジェクトに参加して、印象的だった出来事が2つある。1つ目は、テント内で偶然に元近所の方が再会したことである。震災後初めての再会で、家族は無事なのか、どのように逃げたのか、興奮した様子で再会を喜び合っていた。震災から1年近くたっても、まだそのような状況があることに、私は軽い衝撃を受けた。2つ目は、数人の住民の方から「仮設住宅でイベントが開催される時は必ず参加するようにしているんだ」という話を聞いたことである。一人暮らしの高齢者等が仮設住宅に引き籠る問題はニュースにもなっているため、自分自身で意識して外に出て、人に接するようにしているのだという。定期的にテントを張り、継続して「住民が気軽に立ち寄れる場所」を作る「縁側」の存在は、住民側の需要もあり、意義のある活動なのだと改めて感じた瞬間だった。

道路脇に整然と並ぶ仮設住宅を見ると、まだ震災は終わっていないと感じる。住民の方々にとっては、これからが大変な時期だ。縁あって参加することになったこの縁側プロジェクトで、仮設住宅に住む方々と寄り添い、ともに歩んでいきたい。

「縁側で『こんにちは』プロジェクト」に参加して

梅木俊輔（後期課程2年）

こういっては何だが、私が参加している活動は決して大規模なものでもなく、活動先の仮説住宅にお住まいの人々にとって、私の参加している活動が不可欠なものとなっているかといえば、そんなことはないと思う。私がお邪魔している住宅の週の予定表は、どこかしらの団体の何かしらの活動により、びっしり埋まっている。実に様々な団体が様々なボランティア活動をやっている。そんな中、私の参加している活動は、住人の方と一緒にクリスマスリーフを作ったりすることをはじめ、書初めやフラワーアレンジメント、ヨガのようなちょっとしたエクササイズといったイベントも加わることがあるが、基本、「縁側」というプロジェクト名の通り、お茶とお菓子をお出しし、いらっしゃった住人の方がされる話に耳を傾け時間を過ごすということをしている。

初めてお邪魔した際は、話を聞きに行くという使命感のようなものを抱いた。が、むしろ今は、自分の方が学ばせてもらっていることの方が多いような気がする。例えば、寄り添うとはどういうことなのか。話すのをただ聴いていけばいいのか。スナックのママやカウンターにいるバーテンのようなイメージとも、ちょっと違う気がする。相手は本当に話したいのか。本当の答えはその人に聞く以外分らないと思うが、この活動に参加し、自分が普段行っている話すとか聞くといったことについて、これまで考えてきたことを含め、解釈が広がるのを体験させてもらっている。釣り好きの人がいる。その人は前に同じ話をしていた。しかし前は気づかなかったが、その人は得意げに話し、結構楽しそうにしている。それに気づき、自分がやっていることの意味づけが少しできた気がした。すると、他の人はどんな風に話しているかといった関心も沸いてくる。

ここでの活動には事前に想定してないことが見られることだけは確かである(よく知らない人と会い、その人が話すのを聞くわけであるから、当たり前と言えそうであるが)。そして結構、その時に気づかずに、しばらく経ってから、気づくことも多い。ゆえに自分の中での意味づけや整理は後付け的なところも多くなるが、後付けであれ先付けであれ、取り敢えず自分の中での意味づけができる限りにおいて、今後の活動に参加していくと思う。あまりまとまりのないことを書いたが、今はまだまとまらないので、ここで終えておくことにしたい。

「縁側で『こんにちは』プロジェクト」に参加して

宿利由希子（前期課程2年）

縁側には、2011年12月17日、2012年1月14日、1月21日、2月26日と全4回参加しました。主な活動は、5名程度の年配の方々とお茶を飲みながら話す、5名程度の子どもたち（小学校低学年）と鬼ごっこなどをして遊ぶというものでした。年配の方々には、ボランティアと話すことに慣れており、津波で失ったものの話と日常の面白おかしい話をバランスよく披露しているように感じました。子どもたちは、特に男の子に少し違和感を覚えました。世代の差もあるのかもしれませんが。年配の方にしては子どもにしては、私が彼らの人生にどっぷり深くかかわるわけにもいかないし、自分の人生を語るわけにもいかないし、距離の取り方・自分の立ち位置は最後までわかりませんでした。

縁側参加前は、震災後の松島、石巻、女川で泥かきなどの肉体作業をしていました。数時間の労働が、目に見えた結果を導き、また「だれかの役に立っているなあ」と実感することもでき、心地よくボランティア活動ができました。一方、縁側での活動は、「よりそう」ということをテーマにしているので、「何をしたらいいのかわからない」、「この活動はだれかの役に立っているのか」とかなり悩みました。今も答えは出ていません。少なくとも、泥かき作業などに比べると動機付けを維持しにくいボランティア活動であるという実感があります。

2月26日は、前日大雪だったということで、皆で仮設住宅敷地内の通路の雪かきをしました。仮設住宅の通路は片方の棟の玄関と、もう片方の棟の縁側(?)に面しています。縁側には洗濯物が干してあり、少し手を伸ばせばすぐ触れる距離にありました。雪かきをする私たちに、にこにこ「ありがとうね」「御苦労さま」と声をかけてくれる人がいる一方、私たちがいるせいで洗濯物が干せず、カーテン越しに様子を伺い、雪かきが終わるのを、息をひそめて待っている人もいました。半透明な壁の向こうに「生活」があるという感じでした。とにかく急いで作業を終わらせ、大声を出さず、静かに去るよう努めました。

たった4回しか参加していませんが、精神的にタフな経験をしたと思います。

「縁側で『こんにちは』プロジェクト」に参加して

伊藤崇志（前期課程1年）

ある日、仮設住宅の玄関先に積もった雪を寄せて回っていたとき、一人の女性から「ありがとう、お疲れさま」の言葉とともに缶ジュースとお菓子をいただきました。長くボランティア活動に従事されている方にとってみれば、それほど珍しい場面でもないでしょう。しかし、そのとき私は、恥ずかしながら鳥肌が立つほど嬉しかったのです。

昨年3月11日からの数カ月間、私は尋常ならぬ出来事にただただ圧倒され、自分の生活を維持することしかできませんでした。報道などで津波被害の現状は聞いていましたが、ボランティア活動は何もしていませんでした。日々の生活に追われながらも、どこかに後ろめたさのようなものを感じていたように思います。そのため、名嶋先生のボランティア募集案内を目にしたときは、迷うことをやめ、すぐに参加を希望することにしました。

「縁側」の活動は、個人的にはとても楽しんで参加させてもらっています。活動開始直後は、「こんなことして意味があるのかな？」と考えることもありました。しかしながら、回を重ねるごとに名嶋先生のテントも賑わいを増してきました。顔馴染みの方も増え、本当に誰かの家の縁側のような雰囲気になってきたと思います。仮設住宅の子供たちと遊ぶことの多い私ですが、自分の方が楽しみに行っているようにも思います。

しかしながら私自身、反省すべきこともありました。テントや集会所で寛いでいらっしゃる方々のお話にゆっくり耳を傾けることが、あまりできなかつたように思います。被災された方々の生活の中に入っていくことに対して、いまだ強い緊張があります。もちろん、多少の緊張はむしろ不可欠ですが、表情の強張った人間がいては、周囲の方々にも不要な緊張を与えてしまうでしょう。これからは焦らず心を落ち着かせて、活動に臨んでいこうと思います。

今月11日、東北大学の研究者の論考をまとめた『今を生きる 東日本大震災から明日へ！復興と再生への提言』が刊行されました。名嶋先生をはじめ、複数の先生方が「語ること」の大切さ、その相手としての「他者」と「場所(機会)」の重要性を説いていらっしゃったように思います。「語ること」と「傾聴すること」。それはもちろん、被災された方がその体験を語り、カウンセラーが心のケアにつなげていくことを意味します。けれども、それに限らない日常的で些細なやりとりも、「生きること」と同義ともいえる「語り」に含まれます。冒頭で述べた私の「鳥肌が立つほどの嬉しさ」の正体は、雪かきをするという私の「語り(行為)」に対して、仮設住宅の女性が感謝の言葉をもって応答してくれたために、私自身の「生きること」が成立したことによるものでしょう。「縁側」の活動は決して大規模なものではありません。しかしながら、この活動が、人間のあり方に根ざした「生きること」そのものであると、改めて考えました。そしてそれは、被災された方々のみならず、私たちボランティアスタッフにとってもそうであるように思います。活動中、稀に雰囲気

が悪くなる場面に出会うこともあります。過剰に足を踏み入れようとはせずに、その場に居続けたいと思います。

私は「震災」や「3・11」と口にするとき、いまだに違和感というか、抵抗があります。あの日から今日に至るまでのそれを、外から眺めることができていないのでしょうか。それゆえ私にはこの活動を自身の研究の対象にすることはできないし、今後そうするつもりもありません。ただ、この活動が私自身の、願わくは誰かの「生きること」につながればと、そう考えています。

「縁側で『こんにちは』プロジェクト」に参加して

謝暁静 (GCOE フェロー)

ボランティア活動開始以来、活動に2回参加しました。

一回目の活動は、子どもたちと喋ったり、遊んだりしました。その時、仮設住宅の皆さんと親密な関係を結ぶために、子どもと遊ぶことが効果的であると感じました。この日は、クリスマスのリース作りも一緒にあったので、先生が教える際に、参加者たちの笑顔を見ながら先生の手伝いをして、とても楽しかったです。その日は寒かったですが、充実した一日でした。

二回目の活動の時も、花作りに関するイベントを手伝いました。参加者たちが積極的で、真面目に作る姿を見て感動しました。自分は作り方を知らなかったのですが、コメントしたり手伝ったりして、信頼関係が徐々に形成されてきたと実感しました。更に、年配の方と喋るときに中国に関する話をしたのですが、日中関係をうまく発展させるために、まずは民間の誤解を解消することが重要だと感じました。その日も有益な一日でした。

2回とも地域の人たちと活動参加の記念写真を取りました。しかし、もしかしたら記念写真を撮るのは参加者に対する迷惑になるかもしれないと思い、撮っていいのかどうかを再び検討する必要があるという気持ちになりました。

ボランティア活動への参加を通じて、仮設住宅にお住まいの皆さんの気持ちを理解できるようになってきて、これからの親密な関係の構築に役に立つと思いました。

私は12月のリース作りと2月の節分のときの2度参加致しました。

集会所入り口の小さな階段の手すりに、「縁側」ののぼりを紐で結びつけていた時、後ろから冷たいものが投げつけられました。うしろには小学生がいて、雪玉を投げてきたのでした。そこから雪玉当て遊びが始まりました。小学生とのつながりが「縁側」での初めての交流でした。その後鬼ごっこやかくれんぼをして遊びました。

一人の小学生の男の子が集会所前に設置された「縁側」テントのそばに近づいてきました。一緒にかくれんぼをしないかと誘ったものの乗り気でないようでした。しかしココアを飲めるならと、テント内に入ってくれました。手にはポケモンの本を持っていました。自分も小学生のころポケモンが好きだったので、その話題から打ち解けることができました。人形持ってくる、と言って家から自慢のコレクションを持ってきてくれました。その子の希望のポケモンの絵を描いてみるととても喜んでもらえました。慣れた頃、避難所にいたときの方が楽しかったとポツリ一言。そのときは多くのボランティアの人が来たからだという。つらく不自由だったこともあったのだろうが、そんななかでも楽しいことが心に残っているというのはいいことだと思うし、自分たちの活動でもそういった気持ちになってもらえればという思いになった。

最初に雪を投げてきた女の子は、震災後赤ちゃん返りしてしまったという。その子のおばあさんが彼女の楽しく遊んでいる姿を見て、お話してくださった。しかし徐々にもとの様子に戻ってきたそうで、その日もリース作りでは運営側の手伝いをしていた。

2回目の参加では、1人の中学生の少年と話をする機会があった。部活で先輩がいないということを知っていたので、「もともといないの？」と聞いた。そうしたところ津波で流された、と話してくれた。あくまで「被災した」中学生なので、「被災していない」人と話す調子で質問をしてはいけないのだということをも身をもって感じた。身内のこと、友達のことを聞くのは禁物だと思う。

参加に当たってはそれぞれの被災者の立場に寄り添ってみることが必要だと思う。彼らは大切な人、場所、物を失っている。自分はそういったことを経験したことはないが、だからこそできる限り想定しておかなければならない。その想像が実際の本人の状況と同じものである必要はない。その真偽を確かめる必要などない。テレビ、新聞といったマスメディアから発信される情報をいくらかの手がかりとして、自分なりに被災者の心情を捉えておくべきだ。それによって彼らへの対応はより自然に、相手に嫌な思いをさせないような、心地よいものにできると思う。

「縁側で『こんにちは』プロジェクト」に参加して

キュウキ（特別聴講学生）

今年度のボランティア活動に参加した回数はただ三回だけだったが、様々なことを考えさせられた。外国人としての私には被災者の方々のために何ができるだろうか、今日本の復興現状はどうだろうかと思いながら、この「縁側で『こんにちは』」というボランティア活動に参加した。

このボランティア活動は確かに小規模で、活動の内容も簡単だが、私にとって、被災者とのコミュニケーションができる場所だけでなく、有意義な思い出が作れる活動だと思う。

私ができるのはただお年寄りの話を聞いたり、子供達と遊んだりするぐらいだ。三回しか行ってなかったのに、私の顔を覚えてくださった方がいるので、非常に嬉しかった。恐らく被災者の考えとしては、彼らの散々な経験を聞いてくれる人がいることが必要なのだと思う。私たちボランティアの人生ストーリーには興味を持っていないかもしれない。おしゃべりというより、私ができるのは聞くだけだ。そう言っても、お年寄りの言葉はほとんど聞き取れなかった。本当に悔しくて、私の日本語がもっと上手になればいい。

このボランティア活動で時々イベントを開催するので、少し準備など手間がかかるが、ボランティアであれ、仮設住宅に住んでいる方々であれ、深く交流できるし、気持ちを一つになれることで、素晴らしいと思う。イベントを通して、被災者の方々は元気になれたと思う。特にアレクサンダー・テクニークというイベントでお年寄りの体も動かさせた。お年寄りやはり健康が気になっていて、体を動かせるイベントは有意義だと考えている。

以上述べたほかに、少し困っているのは子供とのやりとりだ。毎回活動する際に、子供は来るが、あまり交流できなくて、毎回声を掛けてみようと思ったが、何故か勇気が出せない。これからの活動は子供との接近ができればいいと思う。

「縁側で『こんにちは』」への意見はあまり思いつかないが、イベントを開催する数が増えれば悪くないと思う。子供でも、お年寄りでも、楽しくやれ、みんな全部参加できるイベントがいいかもしれない。たとえば、一緒に料理を作ることや映画を見ること、あるいは手仕事などいいのではないだろうか。勿論、イベントを行うには色々な準備が必要で、条件の制限も考えなければならない。

私が参加した回数は少ないが、ボランティア活動の意義と主旨は理解できるようになった。数々のボランティア活動で仮設住宅に住んでいる方々の不安や悲しみなど少しだけ取れれば、元気になれば十分だと考えている。一方、被災者達の笑顔を見て、私も元気がもらえた。自分にはできることは本当に僅かだが、これからの活動で留学生なりの力を発揮できればいいと思う。

「縁側で『こんにちは』プロジェクト」に参加して

テ・ヒウン（特別聴講学生）

私はまだ、このボランティアに一回しか参加したことがありません。なので、今からのレポートの内容もその参加した一日のことだけになります。

私が参加したその日は特に他のイベントはなく縁側だけの日でした。まだ冬真っ只中だったので、風がとっても強く、テントの中にもそれがすぐわかるくらいでした。集会所にも人はあまりいらっしゃらなかったのも、たぶん他の日より静かだったのではないかと思います。

主に私がやったことは子供たちと遊んであげることでした。しかし、ある意味、私の方が子供たちに遊んでもらったような気がします。外でみんなと追いかけてっこやかくれんぼをしたり、色んな話をしたり、カルタなどもしたりしました。途中何をして遊ぶか悩んだりした時には、次ボランティアに来る時、何か私の国から面白い遊びはないか探して来ようとも思いました。私は韓国から日本に留学して間もないですが、普段日本の子供たちと接する機会はあまりありませんでしたので、これでいいのかな？と思いつつも、純粋に楽しめました。

子供たちと遊ぶ時間が長かったので、どちらかというと、大人の方の話し相手になることはほとんどできませんでした。また、テントの中で、少しの間みんなと話し合いなどはしましたが、風が非常に強くて、テントの中でも結構大変でした。そろそろ春なので、今はもうその辺は大丈夫になってきたのではないかと思います。

あまり大したことはやっていない上に、ボランティアの初参加のあと少し事情ができ、その後まだ一回も参加していないのですが、参加できたその一回が個人的にはとても楽しかったのも（ボランティアとしてただ楽しかったと言って大丈夫なのかはよく分かりませんが）、4月からはまた参加していきたいと思います。

「縁側で『こんにちは』プロジェクト」に参加して

朴貞和（特別聴講学生）

ボランティア活動は今回が初めてだったので、その前日から緊張しすぎて眠れないくらいでした。まだ日本語での会話も下手なのに大丈夫なのか、他のボランティアさんに迷惑かけてしまうのではないのかなどの考えがずっと頭から離れなくて、とても不安でした。ですが、村の人たちも一緒に活動した他のボランティアさんたちもみんな優しく、不安はすぐ消えました。緊張で硬くなった私に先に声をかけてくれたり、私の前垂れを見て正しい前垂れの結び方を教えてくれたり、開店後も何をすればいいのか分からなくて困っていた私に話をかけてくれたりしてたので、嬉しかったです。

喫茶店に初めて訪ねてきたのは、おじいさんの方々でした。お茶を飲みながら、楽しそうにいろいろな話しをしてくれました。最後にはおじいさんの一人の方がハモニカ演奏を何曲か聞かせてもらいましたが、曲の中で私も小さいころよく聞いた童謡があったので、びっくりしながら日本と韓国の近さを感じました。その後、お昼まで小学生の女の子二人と遊びました。遊びの名前は忘れてしまいましたが、全部走りながら追ったり逃げたりするものだったので、遊びが終わった後は運動不足で大変でした。けれども、子供たちの年齢がちょうど私の妹と同じで妹のように感じられたので、つまらないと思われないう頑張りしました。

午後には、おばあさんに一年前起きた大地震の被害者の遺族が書いた詩をもらいました。ニュースで津波の動画を見た時も怖いと思ったのですが、おばあさんから詩を聞いたときはとても悲しかったです。大切な人を失った気持ちが私にも伝わってきて、涙が出そうになりました。また、改めて自然の恐ろしさを感じました。閉店時間に近づくとお客さんもほとんどいなくなり、午後3時から喫茶店を片付けた後、解散しました。

寮に戻って、いろんなことについて考えることができました。まず、ボランティア活動をしに行って本当に良かったと思いました。積極的な性格でもなく、人と話を続けることも上手にできない、こんな私でも何か役に立つならやりたいと思って始めたボランティア活動でしたが、むしろ私のほうが、みんなにたくさんもらったような気がしました。そして、また今度ボランティアに参加するときには、せめて相槌でも上手く言えるように、聞かせてくれる話をもっと理解できるようになるために、日本語の勉強も頑張らなければ、と思いました。まだ一回しか参加できなかったのですが、これからもっと頑張りたいと思います。

5. 今後の課題

2011年度の活動を通じて浮かび上がってきた課題は以下の通りである。

まず、「縁側」の提供する「コミュニケーションの場」をどのように広げていくかという問題がある。ただ、これについては闇雲に拡大することがよいとは思わない。地道な活動を通して着実に広げていくしかないであろう。幸い、春になり人々も行動的になると思われる。外を歩く人々に積極的に声をかけ、縁側に座ってもらえるよう誘いかけをしていきたい。

それとも関連するが、2012年度は「いっしょになにかする」機会を増やす予定である。すでに具体的な計画を進めているが、まだ充分ではない部分もある。講師として「いっしょになにかする」機会を提供してくれる人材の確保が今後の課題である。

人材の確保という点で言えば、スタッフとして活動するボランティアの確保も重要な課題である。年度が変わり諸般の事情でボランティアを続けられないメンバーや当面活動を休止するメンバーが出てきているのが実情である。先にも述べたが、今後の活動計画を考えると、これまで以上にボランティアの人員数が必要になる。すでにボランティア募集のポスターを掲示し、今後は各専攻分野あてにチラシを配付し、掲示と声かけを依頼する予定である。

以上のような課題を解決し、来年度も意義のある活動を続けていきたい。

6. 最後に

手探りで始めた本事業であったが、名取復興支援センターひよりの皆様、学外の支援者の皆様、そして、なによりも愛島東部住宅にお住まいの皆様のご理解とご協力を賜り、一定の成果を得て2011年度の活動報告を行うことができたことに取組責任者としては安堵している。文学研究科構成員の皆様には広報や会計処理等々で活動を支えていただいた。また、ボランティアスタッフは自発的に貴重な週末を活動に充ててくれた。関係者の皆様には改めて深く感謝申し上げる次第である。

1995年の阪神淡路大震災の例からも分かるように、震災からの復興の取り組み、新しいまちづくりの取り組みは決して短期間で終わるものではなく、息の長い継続した取り組みが求められるものである。また、政府や自治体といった「公」との役割分担と協働も必要であるし、「企業」と「市民」との役割分担と協働も必要であろう。「市民」の中でも「NPO」の活動と「一市民」の活動という差もある。

本事業は文学研究科研究科長裁量経費の支弁を受けて活動しているものであるが、取組責任者は職業的な社会活動家でもイベントプロデューサーでもない一教員である。したがって、できることには限りがある。しかし、微々たる活動であってもやらないよりやったほうがよいと考えている。今後とも本事業の活動にご理解とご協力を賜わりたくお願い申し上げます。また、少しでも興味を持っているのであれば、どうか活動に参加していただきたいと考えている。このお願いをもって報告書を終わりとしたい。

2012年3月31日

文責：取組責任者 名嶋義直